

宝彩有菜の

バガヴァッド・ギーター

第8回 「神とは、悟りとは、悟る方法とは」

text: 宝彩有菜

バガヴァッド・ギーターの第9章で、クリシュナはいきなり、
「アルジュナよ、君は純心で素直な気持ちでいるので、これから最も神秘的な知識を授けよう。これを知れば、諸悪と苦悩から解放される。」(9.01)
「これは神秘中の神秘、無上の力であり、悟りへの道である。その上、至極簡単に永遠に続く歓喜の道である。」(9.02)
と、とても重要そうなことを話し始めます。
「わたしの中に、この全宇宙は広がっている。全ての存在はわたしの中にあり、わたしが彼らの中にあるのではない。」(9.04)
「だが万物が物質としてわが内にあるのではない。わたしは全生物の維持者であらゆる所にいるが、宇宙現象の一部ではなく創造の源泉である。」(9.05)
と言います。
世界を作ったのは自分であり、それを破壊して、また、再生するのも自分であると言います。自分は一番偉大な神だというわけです。

このように、第9章は、神について、つまり、クリシュナについて、語られています。クリシュナが、自分から、「私はこのようなもの」だと、アルジュナに自己紹介しています。

そしてこの後しばらく、自分がどんなに凄い神様であるかを、延々と語り続けます。
バガヴァッド・ギーターは、韻を踏んだ、口承の文学ですから、このあたりは、朗々と語り部が最高潮に謡い聞かせるところなのだろうと思いますが、とにかく、この辺りから、しばらく、それが続いていきます。例えば、

「わたしは目標であり、サポーターであり、主であり、観察者である。わたしは住むところであり、避難所でもある。そして友であり、起源である。私は消えて無くなるものであり、また、万物の基礎である。宮殿であり、不滅の種子である。」
「アルジュナよ、わたしは太陽であり、熱を与え、雨を降らせたり、雨を止めたりする。わたしは不滅であり、また死である。宇宙であり、無である。」(9.18 9.19)
などと。そして、
「常にわたしを信頼し、わたしを想い、わたしに従い、わたしを礼拝せよ。常にわたしに身心を捧げている者が、わたしのもとに来るのは当然である」(9.34)
と言い、それまでに、悟った幾多の有名な神々さえもみんな、クリシュナを礼拝、信奉したと言います。

そのように、力をこめて凄い凄いと言われても、アルジュナは、「そうかなあ。そんなに凄いのかなあ」という気持ちになるだけで、目の前のクリシュナが神様だなんてまだ本気では信じられません。クリシュナは、アルジュナが所有する戦車の御者です。尊敬する親友ですが、今で言えば、アルジュナのお抱え運転手です。

そんな気配を察知したクリシュナは、第10章に入り、少し言い方を変えます。
第10章の冒頭では、
「勇者であるアルジュナよ。君はわたしの親友だから、今までよりさらに良い知識を話して聞かせよう。」(10.01)
と、さっきの話に、あまりアルジュナが乗ってこなかったようなので、一段上の知識を教えようと、気を引

いている感じです。

そしてここからまた、クリシュナの「自慢話」が続きます。ちょっと私には、「自慢話」のように聞こえます。「千万の神々も偉大な聖者たちも、わたしの起源、全相を知ることにはできない。なぜなら、あらゆる意味において、わたしが神々と聖者の出所なのだから。」(10.02)

「七大聖、またそれ以前の四大聖、そして、人類の祖・マヌたちは、わたしの心から生まれた。無数の星界に住む生物たちはすべて、彼らを祖として発生したのである。」(10.06)

そして、この自慢話かと思えるような話を延々としているクリシュナが、やっと本当の意図らしいことを言います。

この部分が、第10章の最も重要な言明だろうと、私は思います。

「わたしを信じ愛して常に仕える者に、わたしは修行の方法を与える。それによってわたしのもとに来ることができる。つまり悟れるのだ。」(10.10)

つまり、クリシュナを信じて敬愛する者に、悟りの道、悟り方、悟りの方法を与えるということです。

すると、アルジュナも、やっと、その気になって言います。

「あなたは至高のブラフマン、無上の安息所、そして全てを浄化する御方、永遠至聖にして不生無始、全宇宙に遍在する元始の神です。」(10.12)

「願わくは、あなたの聖なる御力と、全ての宇宙、全ての星界に、光り輝き満ち溢れている荘厳華麗な実相についてお話してください。」(10.16)

アルジュナは、クリシュナは、凄い神様だということは、わかりましたが、「敬愛する」まではなかなか行けません。といっても、どうすればいいのかわかりません。そこで、どんなに凄いのか、それをお話してください。凄い、凄いというけどよくわかりませんので、どう凄いのですか？ と聞きます。クリシュナが凄いことが分かれば、自然に敬愛もできそうです。

それを聞いた、クリシュナは、

「よろしい。ではアルジュナよ、わたしの光り輝く実相の、主要なものだけを語って聞かせよう。詳しく言えば、たくさんありすぎて際限がないからだ。」(10.19)

と言って、どのように凄いのか、また、それを語り始めます。

「光るものの中で、わたしは太陽。風の神々の中では、その支配者マリーシ。星々のなかで、わたしは月である。」(10.21)

と、一番優れたもの、一番強力なものを、次々にあげていきます。

このあたりは、古代のインドの人々が、様々な事象や事柄にランク付けしていた様子が想像できて面白いです。

「獣のなかでは、獅子。河の中では、ガンジス川。山ではヒマラヤ。」

「武器の中では、カミナリ。季節の中では、春。水中の生物では、サメ。征服者の中では、時間。」

などと、延々と第10章の、第20項から、第38項まで、ずっと同じ調子で続きます。

ともかく、想像を超える、もの凄い神様であると、クリシュナはアルジュナに言っています。

これで、第10章は終わります。第11章は、今まで黙って聞いていたアルジュナが、今度は、クリシュナに質問するところから始まります。

「あらゆる神秘のなかで、最も神秘的な真我について、万物の生成と消滅を、あなたから詳しく聞きましたので、私の迷いは今や全く消え失せました。」(11.01) (11.02)

と、アルジュナは、クリシュナの話を、一応、「わかりました。凄いですねえ」と感想を述べています。迷いは全く消え失せましたと言っていますが、しかし、アルジュナは、本心では納得していません。

そこで、

「もの凄い神様であるクリシュナよ、あなたは自ら語られた通りの御方だとは思いますが、願わくは、あなたが宇宙現象のなかで活動している本当の御姿を、わたくしこと、アルジュナに見せて下さい。」(11.03)

と、話だけでなく、その姿を見せてください、と懇願します。

アルジュナは、『いくら言葉で説明されてもなあ、信じられないなあ。実際に見てみないと納得できないなあ』と思いながら、聞いています。

「クリシュナよ。もし、宇宙的形相を見る資格が私にあると思われたなら、なにとぞヨーガの支配神よ。あなたの宇宙的形相を私に示したまえ。」(11.04)

と頼みます。

クリシュナは、どこまでも親切ですし、アルジュナがどうしても見たいと懇願するので、その要求に応えます。

「では、アルジュナよ。見るがよい。何千何万という様々な性質と、形と、そして色とを持ったわたしの強大壮麗な姿を。」(11.05)

そして、アルジュナは、見ます。そして、それを見てびっくりしたアルジュナが言います。

「おお、わが神よ！ あなたの体内に、あらゆる神々と多種多様な生物が見えます。蓮華の上に座すブラマーもシヴァ大神も、あらゆる聖賢も。」(11.15)

「始め無く、中間無く、終り無く、無限の力と千本の腕を持ち太陽と月はあなたの両眼、口からは光り輝く火炎を吐き、あなたの光で全宇宙は燃え上がっている。」(11.19)

「神々のなかの神よ、何と恐ろしい御姿か！ あなたは誰なのですか？ 何とぞ私に慈悲をたれ給え、万有の始祖なる至上主よ、私はあなたについて知りたい。あなたの御意志が私には分からないのです。」(11.31)

クリシュナの本当の姿を見たいと言ったアルジュナに、クリシュナが本当の姿を見せたら、アルジュナは、その形相のあまりの凄さに動転してしまって、一体全体、あなたは、何なのですかと、聞きます。何がしたいのですか、その意図はなんですか、ということです。

そう問われて、クリシュナが、答えます。

「わたしは“時”である。もろもろの世界の大破壊者である。わたしは人々を滅ぼすために此処に来たのだ。お前ら兄弟を除いて両軍の将兵は全て殺される」(11.32)

「故に立ち上がれ。戦って栄誉を勝ちとれ。敵を征服して王国の繁栄を楽しむがよい」

クリシュナは、私の意図は、アルジュナの敵を滅ぼすために来たのだと言います。だから、アルジュナは、それを信じて躊躇しないで、とにかく、勇気を持って戦えと言います。戦いをけしかけています。

イエスの言明にも、似たのがあります。同じように戦いをけしかけています。

「私は、平和をもたらしに来たのではない。剣を投げ込むために来たのである。私が来たのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をその姑と仲たがいがいさせるためである。そして、家の者がその人の敵となるであろう」

これは、マタイの福音書の10.34-36で、ルカの福音書12.51-53と並行しています。

また、トマスの福音書にも、

「その父とその母を憎まないものは、私の弟子であることはできないであろう」

とあります(トマス55番)。

これと同様な内容が、マタイ 10.37-38、ルカ 14.26-27にも並行して書かれています。
つまり、イエスもクリシュナも、親兄弟、親戚縁者達と戦えと言っているわけです。

あまりに凄いクリシュナの本当の姿を見たアルジュナは、「もう、結構ですから、もう、たくさんですから、是非、元の姿に戻ってください」と言います。

クリシュナは、少し、やりすぎたかなと思ったかどうかは知りませんが、

「アルジュナよ。わが神力により、この普遍相を君に見せたことを喜んでいる。光り輝く無方辺の相、元始根源の姿を、今まで誰一人として見た者はいない。」(11.47)

「わたしのすさまじい形相を見て、君は怖れうろたえたが、さあ、もう安心するがよい。そして、君の望み通りの姿を見なさい」(11.49)

と、言って、

「もとの二本腕の姿にもどって、怖れおののいているアルジュナを慰めました」(11.50)

もとの美しい姿になったクリシュナを見て、ほっとしたアルジュナは、

「クリシュナよ。人間の姿に戻ったあなたを見て、私の気持ちは落ち着きました」(11.51)

と言いました。

クリシュナが、アルジュナに話します。

「アルジュナよ、わたしを信愛することによってのみ、真実の姿を見得るのだ。わたしの神秘に参入できるのは、この方法をおいて他に無いのだ。」(11.54)

ということで、バガヴァッド・ギターが一番ドラマティックな、壮大な映像である第11章は終わっています。

つぎは、では、どうやったらクリシュナを信愛できるかということになります。

その説明は、第12章以降に続いていきます。

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「なんとなく、納得が行きませんが」

「どこが？」

「どこがって、これって、修行の話ですよ」

「そうだね。バガヴァッド・ギターは、修行の話だ」

「凄い神様が、現れるのが修行の話なんですか？ 笑雲先生は、こんなお化けみたいな神様を信じられますか？ 見せてくださいと言ったら、ほら一つ、これを見ろっていうような」

「あはははは、まあ、無理だね。」

「そうでしょ。こんな作り話」

「あはははは、なるほど」

「だったら、一体何の意味があるんですか、この話は」

「ああ、そうか。なるほど。まず、このバガヴァッド・ギターは、そもそもは、教えの話だ。インドの大叙事詩マハーバーラタという、古代の演劇というか、エンターテイメントに埋め込まれている。エンターテイメントだから歌舞伎とかもそうだが、派手だ。地味ではない。面白くてある。だから、その中に埋め込まれたバガヴァッド・ギターもその特徴は持っている。クリシュナがどんどん自分を説明するのにエスカレートしたわけだ」

「なるほど。聴衆を喜ばせるためということですね」

「そうだね」

「では、もともとの教えには、そのような派手さは無かったのですか？」